

AJCC 研究会報告

「国産二眼レフ A～Z」

会員番号1017 菅澤光裕

令和元年(2019年)5月11日
於 JCIIビル6階



研究報告で熱弁を揮う菅澤会員

国産の二眼レフは、戦前にはローライコードを手本とする十機種程度があるものの、評価の定まった機種は少ない。終戦から数年の段階では数種類が市場にあったただけだが、リコーフレックスⅢの大ヒットで状況が一変する。もともと機構が単純で、レンズとシャッターを入手できれば組立は比較的容易であったことから、四畳半メーカーと呼ばれる弱小メーカーが乱立し、ブランド名でAからZまで全て揃うと言われる状況になった。実際にはJ、U、Xを頭文字とするブランドは見当たらず、23文字に止まるが、その23文字を代表する機種をそろえることが出来たので、表記の題で発表したい。筆者の調査では210ブランド程あったが、研究会ではそのうち92ブラ

ンド、162台を写真で、また実物を18台持参して紹介した。

【凡 例】

頭文字ごとにブランドと特記事項を列記する。特記事項のない機種は省略。機種名の後に製造会社名と西暦発売年を括弧書きで示す。添付の23台の写真は各アルファベットの代表機種、または珍品機種で、持参した18台を全て含む。

【A】

AIRES FLEX(アイレスカメラ1952)やALPEN FLEX(八陽光学1952-53)が代表的だが、他にALFA FLEX(アルファカメラ1952)やAMI FLEX(関東光学1953)などがある。

【B】

BEAUTY FLEX(太陽堂1952-55)が何といても中心で、数多くの機種を製造している。他に戦前のトイカメラBABY ROLL REF(湯沢製作所1937)などがある。

【C】

COSMO FLEX(アルファカメラ1952)が代表的だが、CHESTER FLEX(銀鈴光機1954)、COMPANION(銀鈴光機1953)などは珍しく、CRYSTAR FLEX(クリスター光機、大城製作所1953)など数多くのブランドがある。



AIRESFLEX



BEAUTYFLEX 2.8



COSMOFLEX II



DORIMAFLEX A I



ELBOW FLEX



FIRSTFLEX II



GRACEFLEX



HACOFLEX

【D】

DORIMA FLEX(東京光機1951-52)が代表的で、これは三和商会向け。他にDELICAFLEX(東郷堂1952)、DORISFLEX(ドリスカメラ1954)がある。東郷堂は極めて多種のブランドを展開した。

【E】

ELMOFLEX(エルモ1950-53)が代表的であるが、Eでは東洋精機が様々なブランドを展開している。EASTERN FLEX(東洋精機1955)、ECHO FLEX(東洋精機1952)、ELBOW FLEX(東洋精機、コスモカメラ)、ELEGAFLEX(東洋精機1951-53)、ELIZAFLEX(光洋精機、東洋精機)があり、いずれも数が少ない。他にもEICAFLEX(エイカカメラ1954)がある。

【F】

FIRSTFLEX(常盤精機1951-55)をよく見ることが、大戦中にFIRST REFLEX(ファーストカメラ1942-43)が発売されている。FUJICAFLEX(富士写真フィルム1954)は機能満載だが高価すぎて数は売れなかった。珍しいFUJITA-A(藤田光学)もある。

【G】

GRACEFLEX(木川光学1951)が代表的。他にGELTOFLEX(東亜光機1952)がある。

【H】

HOBIFLEX(東郷堂1952、53)をよく見ることが、Hには珍しいものも多く、輸出用と思われるHACOFLEX(東郷堂)、HALMA FLEX(原製作所)や、トイカメラHOBIX(東郷堂1954)、F値の怪しいHONESTFLEX(銀鈴光機1953)、HONORFLEX(瑞穂光学1955)がある。

【I】

ほとんどISOCAFLEX(磯川光機1952)しか知られていない。

【K】

KALLOFLEX(興和光機1954)をよく見ることが、普及版のKALLOVEX(興和光機1958)は珍しい。KONIFLEX(小西六写真1952)は高級品。謎のKELUNFLEXもある。

【L】

LAURELFLEX(東京光学1951)は服部時計店向け。東京光学は販売店に合わせた二眼レフのブランド展開をしていた。LUSTRE FLEX(ラスター光機1955-56)もよく見る。LYRA FLEX(富士光学1941、勝間光学1953)は戦前の富士光学から戦後の勝間に引き継がれた。LEADAFLEX(新光商会1952)は珍しく、LARKFLEX(東洋精機)やLAUTER FLEXは謎のカメラである。

【M】

Mには、私が考える国産二眼レフ三大ブランドの2つがあるうえ、23文字の中で最も多くのブランドが乱立している。

まずMINOLTAFLEX(千代田光学1936)はプリンスフレックスにわずかに遅れるものの、日本最初期の二眼レフである。その後の数機種をへて完成するMINOLTA AUTOCORD(1955-1965)各機種は、ロコールレンズの優秀さや独自の工夫(上から下のフィルム走行、ハラキリ型ピント調節など)により、一貫してプロユースに耐える高級路線を維持し続け



ISOCAFLEX



KALLOFLEX



LYRA FLEX J



MAMIYAFLEX C330



NIKKO FLEX



OSIROFLEX



PHOTOCA FLEX



QUEEN FLEX

た。MAMIYAFLEX(マミヤ光機1948-69)は戦前に試作があるものの戦後のジュニア版に始まる。当初からリコーより早かったギア式前玉回転ピント調節などの独自開発を続け、特にCシリーズはある意味でローライフレックスを超えたと言ってよい。特徴はレンズ交換、フィルム平面性確保、蛇腹とラック&ピニオンによるピント調節の3点である。最終機C330Sは1994年1月まで販売され、日本最後の二眼レフでもある。この点について質疑で最後はヤシカマット124Gであるとの指摘があったが、「魅力再発見・二眼レフ 写真工業8月号別冊 2006年7月31日刊」の根本泰人氏、小山伸也氏の記事や、ネット上のWikipediaの「二眼レフカメラ」の項の記載からヤシカの販売終了は1988年で、やはりマミヤが最終機と考えられる。他にはMALCAFLEX(武蔵製作所1952)、MANANFLEX(三和写真1955)、MARIOFLEX(O. M. S. Optical 大城光学1953)、MASMY FLEX(高川光学1950、後マスマー光学)、MEIKAIFLEX(東郷堂1948)、MERICA FLEX(メリカカメラ1953)、MIDDLE FLEX(音羽光機1952)、開け方が極めて特徴的なMIKONO FLEX(小島光学1952)、トイカメラのMUSEFLEX(東郷堂1950)など、多彩

である。さらにMANONFLEX(三和写真)、輸出用と思われるMIRROFLEX(東郷堂)は情報のほとんど無い謎のカメラである。

【N】

NIKKENFLEX(日本光研1953)をよく見るが、前身のNIKKOFLEX(日本光研1950)は珍しい。

【O】

OLIMPUS FLEX(オリンパス光学1955)が代表的であるが、OPLIN JUNIOR(五洋商会)やOSIROFLEX(大城光学1955)もある。

【P】

大澤商会向けのPRIMOFLEX(東京光学1950-52)とエンドー写真用品のブランドPIGEONFLEX(八州精機、信濃精機、大城精機、長谷川製作所1954)が代表的。プリンズブランドはPRINCE BABYREF(プリンスカメラ1939)、PRINCE FLEX(東洋精機)、PRINCE JUNIOR(プリンスカメラ1955)とあるが、日本最初と言われるプリンスフレックスは藤本製作所製であった。他に珍しいPHOTOCA FLEX(日本フォトサービス、

PHOTONFLEX(55)がある。

【Q】

QにはQUEENFLEX(スーパー写真用品)しか無いと思われる。

【R】

三大国産二眼レフブランドの残りRICOHFLEX(理研光学1950-56)がある。戦前に森製作所によるOEM製品があるが、戦後に徹底的な生産合理化を行ったⅢ型が安価を武器に爆発的な大ヒットとなり、日本における二眼レフブームの立役者となった。Ⅲ型は三脚座に占領下を示すMIOJの刻印がある。バージョンを重ね、後に高級版DIAシリーズも出した。ROLLEKONTER(森製作所1940)は戦前のヒット二眼レフ。RECTAFLEX(木川光学1951)、RIPEFLEX(ライブ光学1953)、RUVINAL FLEX(昭栄産業1956)もある。

【S】

SILVERFLEX(日本光機1953)をよく見るが、輸出用SAWYER'S(東京光学1958)やSOLIGOR REFLEX(常盤精機1952)がある。



RICOHFLEX III



SUNFLEX VI



TUBASA FLEX JUNIOR



VERI FLEX



WALZFLEX



YASHICA FLEX S



ZENOBIAFLEX

SUPER FLEX(美光堂1950-52)はユニバーサル版があり、SANCOFLEX や、太陽堂製ではないかと疑っているSUNFLEX は、情報のほとんど無い謎のカメラである。

【T】

自社ブランドのTOPCOFLEX(東京光学1951)と、TOYOCOFLEX(東郷堂1954、55)が良く知られているが、ジュニア版もあるTUBASAFLEX(木川光学1951)やトイカメラのTANZER(野村光学1953)もある。

【V】

ほとんどVERI FLEX(小林精工1954)しか知られていないが、VESTERFLEX(銀鈴光機1953)もある。

【W】

WAGOFLEX(ワ ル ツ 商 会 1954)とWALZFLEX(ワ ル ツ 商 会 1955-57)のワ ル ツ 商 会 の カ メ ラ が 代 表 的 。 W E L M Y F L E X (大 成 光 機 1956) も 有 る 。

【Y】

何と云ってもYASHICAFLEX(八州光学1954-59)が代表的でYASHICA ROOKIEやYASHICA-MAT類(1957-c.1971)を含めると20機種を越えるヤシカ名二眼レフを国内外で販売している。前身のYASHIMAFLEX(八州光学1953)銘もある。YANMERFLEXは情報の少ない謎のカメラである。

【Z】

ほとんどZENOBIAFLEX(第一光学1953、後ゼノビア光学)しか知られていない。

概観してみると、国産二眼レフは1950年代前半に一時的な大ブームを経験しているが、1950年代後半には一気に下火となり、マミヤやヤシカなど一部のメーカーを除き、多くのメーカーが撤退している。残念なことに当時乱立した四畳半メーカーの中から、その後もカメラを作り続けたメーカーはほとんどなく、本当に一過性のものとなってしまっている。それは製作が容易であった二眼レフの特徴なのかもしれないが、もともとカメラを製作していた技術力のあるメーカーでなければ、すでに一眼レフ時代に入っていた時期には、とても新たな機種が発売は出来なかったからだと思う。それでも二眼レフブームのおかげで、数多くの名機が残ったことは評価すべきで、結果として私たちに楽しみを提供してくれている。

(おわり)